

氏 名	もうりえいすけ 毛 利 英 介
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 444 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	遼代国際関係史研究

論文調査委員 (主査) 准教授 中 砂 明 徳 教 授 杉 山 正 明 教 授 吉 本 道 雅

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、契丹（遼）の視点から見た国際関係史、特に五代・北宋の中原政権、高麗、西夏との関係、あるいはこれらの諸国で構成される多国間関係について論じるものである。「序章」・「結語」のほか、四章で構成される。

「序章」では、まず契丹を中心とした当時の国際関係史を論じる意義について述べる。十～十二世紀のユーラシア東方において契丹は最強の存在であり、北宋とは百年以上にわたる対等な外交関係を保っていた。中国を中心とするいわゆる「冊封体制論」はこの時期に通用しない。中国・日本よりむしろ、中華主義からとりあえず自由な欧米の学界において、この時期の外交史のユニークさに多くの関心が寄せられているが、視点そのものはやはり中国中心であることを免れていない。契丹を中心とした国際関係史の叙述が要請されるゆえんである。

また、当時の高麗政権にとっては、宋との関係よりも、授封者である契丹との関係のほうが重要であったが、そのことがこの時期の外交史の大枠を考慮する際にあまり注意されていない。さらに、この時の遼麗関係がその後の中国大陆と朝鮮半島の関係に多大な影響を及ぼしたことも見逃すべきではない。このように、契丹を基軸として当時の国際関係を捉え直すことは、当該時期をこえて、ユーラシア東方における外交関係の通史的把握に寄与することになるのである。

第一章「澶淵の盟の歴史的背景について―雲中の会盟から澶淵の盟へ―」は、契丹と北宋の間で一〇〇四年に結ばれた、いわゆる澶淵の盟の歴史的背景について検討するものである。

まず澶淵の盟における規定において特徴的な諸点、具体的には契丹への歳贈、皇帝同士の間制的血縁関係の設定、「北朝」・「南朝」という相互称呼等について、いずれも契丹と後唐以降の王朝間ですでに同様の関係が見られたことを確認する。

次に、契丹と北宋の間で結ばれた澶淵の盟は契丹と後晋の関係の再現とも言うべきものであり、さらにそれが契丹の耶律阿保機と沙陀の李克用の間で結ばれた「雲中の会盟」にまで遡ることを論証し、九世紀半ばのウイグル帝国の崩壊後における契丹・沙陀勢力の並行的台頭の帰結が澶淵の盟であると見る。

第二章「一一世紀後半のユーラシア東方における北宋の国際的地位について―宋麗通交再開を手がかりに―」は、神宗朝において数十年ぶりに再開された対高麗通交の再開をとりあげる。従来、これは神宗の積極的な対外政策の一環としてとらえられるのみで、高麗の外交に影響力を有していた契丹の存在がなおざりにされてきた。『東坡志林』の記事を分析することによって、この交渉が契丹の監視下におかれていたことを確認し、当時の外交の主導権を握っていたのは契丹であったとする。

ついで、そのような宋麗関係を一部分とする当時の国際関係を表現するものとして、各国における方向認識の問題をとりあげ、石刻史料をも援用して「北遼、南宋、東麗、西夏」といった呼称が当時使用されていたこと、契丹を北極―中心とする世界観が各国に共有されていたこと、そして、それは宋を中心とした世界観に対して優越していたことを指摘する。

第三章「一〇七四から七六年における契丹（遼）・宋間の地界交渉発生の原因について―特に契丹側の視点から―」は、

一〇七〇年代に契丹と宋の間で行われた代北における地界交渉について論じる。地界交渉についてはこれまで宋側の観点から語られることが多かったが、本章はその発生の原因が契丹側の内部事情にあったことを明らかにする。

まず、代北の地が契丹政権にとっていかなる意味を持つ土地であるのかを考察し、さらに交渉が一〇七〇年代に発生した原因を探る。とくに、契丹側が「代北は乙室部の遊牧地である」と主張している記事に注目し、乙室部の契丹政権内における位置を見定めようとする。乙室部をどうとらえるかについては、先行研究でも意見の分れるところであるが、論者はそれらを批判して、その独立性の強さを確認し、皇帝が交渉に圧力をかけるべく代北に巡幸したのは、強大な部族である乙室部への顧慮によるものであると指摘する。

ついで、乙室部人蕭巖寿をはじめとする交渉参加者の多くが太子派であったことを突きとめ、同時期の太子派と権臣耶律乙辛の一派の闘争が地界交渉の背景にあったことを明らかにした。

第四章「一〇九九年における宋夏元符和議と遼宋事前交渉」は、北宋と西夏の戦争後に結ばれた「元符和議」に先立つこと半年前に開封に派遣された契丹の特使と宋の朝廷間の外交交渉に焦点をあて、宋夏間の係争の調停者として介入した契丹の動きをはじめて詳細に追究し、その外交的意図を探ったものである。

まず、この時の外交文書として「白箚子」に注目する。これは、儀礼的側面が強い国書より実質的な内容を含むもので、この交渉においてはとりわけ大きな意味を持った。この白箚子には前例として従来の交渉のことが具体的に言及されており、これを手がかりとして、一〇四〇年代、一〇八〇年代、そして交渉の数年前の三国関係が今回の交渉にどう作用したのか、両国が前例の存在をそれぞれいかに利用したかを解きほぐす。さらに、宋側の当局者であった曾布の『曾公遺録』を駆使して交渉の詳細を復元し、そこに西夏の動きをからめて、宋側の史料からは直接には見えにくい遼側の意図を明らかにする。そして、契丹がこの交渉において、直接的な利益を見込めないにもかかわらず、開封に使者を派遣する一方で皇帝が代北に巡幸して圧力をかけ、宋側の答使との面会を故意に遅らせるなどして、宋夏関係に積極的介入を図ったのには、自らを中心とする国際秩序を維持する狙いがあったと述べる。さらに、当時の遼宋関係の安定性が次代の天祚帝と徽宗治世下の両国関係史の前提となる、と次代への展望も示している。

「結語」では、以上の各章で述べ来たったことを総括し、十一世紀当時のユーラシア東方世界における国際関係は、契丹を頂点として、宋遼の南北のラインを機軸に成立・展開していたことを確認する。

論文審査の結果の要旨

契丹人が建てた遼朝の研究が近年とみに盛んになってきている。一九三〇年代の慶陵調査やカール・ウィットフォーゲルのとなえた征服王朝論（一九四九）などによって遼朝に対して多大な関心が喚起せられたことがあるが、それ以来のブームが訪れつつある。ただ、前次の関心が遊牧文化と中華文化の交渉に集中してもっぱら中国王朝史の文脈の中にあったのに対し、今回のそれは広くアジア世界の中に遼朝（キタイ）という巨大な帝国をいかに位置づけるかというところにあり、そうした中で、たとえば日本とのかかわりなどにも注目が集まっているのである。

本論文はこうした研究潮流に倅さして、十世紀から十一世紀末に至る遼朝の国際世界における位置取りを、宋・高麗・西夏との交渉関係を通じて確認しようとするものである。十世紀から十三世紀、つまり唐朝の滅亡から元朝の統一にいたるまでの東アジアの動乱期において、五代・宋（南朝）に対峙する遼・金（北朝）の存在が大きく、中華王朝は唯我独尊たりえなかった。であるにもかかわらず、当時の国際関係を考える時、やはり中華王朝を中心に見ようとする研究姿勢が強固に存在している。それに対して、遼を基軸として国際関係史を見直そうとするところに、まず本論文の新味がある。

また、五代諸王朝と契丹の関係、澶淵の盟の締結や代北（山西省北部）をめぐる地界交渉などの宋遼関係、宋一西夏戦争への遼の介入、遼と高麗の関係史については、個別に多くの研究蓄積があり、これらのトピックのいくつかをとりあげたものや二国間関係史を通観した著作（陶晋生『宋遼関係史研究』一九八四、楊渭生『宋麗関係史研究』一九九七、金在満『契丹高麗関係史研究』一九九九）もすでに存在するが、一世紀半にわたる長期間の遼・宋・高麗・西夏の四国関係を一貫した見通しのもとに論じた著作はまだ出現していない。本論文はその難題に果敢に挑戦している。その特色と成果を以下三点に整理する。

〔1〕澶淵の盟の意義の見直し

一〇〇四年に遼・宋間で結ばれた澶淵の盟はその後の二国の関係を規定した画期的なものであるとされるが、それだけでなく、二世紀以上にわたって東アジアの国際関係に大きな影響力を及ぼしたものであるために、近年その再評価の気運が高まっている。しかし、その画期性が強調される反面、盟約の成立の歴史的背景がなおざりにされているきらいがある。むしろ、前代にさかのぼって、その淵源を探る研究はすでに存在するが、それらはともすれば五代王朝を一括して扱う傾向がある。

論者は第一章において、五代最初の後梁王朝と沙陀族の政権である後唐以下の王朝の間にはっきりと界線を引き、後者と契丹の間において、血縁関係の設定、契丹への歳贈、南朝・北朝という対等呼称の使用といった澶淵の盟の内容がすでに行われていたことを明示し、澶淵の盟を九世紀半ばのウイグル帝国崩壊後に出現した二強一契丹・沙陀の関係の帰結と位置づける新しい視点を提示している。

〔2〕遼の外交と内政の連関への着目

当時の東アジア外交が遼を軸として展開していたとするならば、その国内情勢は外交関係に影響を及ぼすはずだが、従来の外交史研究において、遼政権内部の事情が問題にされることはほとんどなかった。たとえば一〇七〇年代の代北地界交渉も、宋の視点から取り上げられているだけである。第三章は、この時期に遼の道宗皇帝が代北に巡幸しているという事実に着眼し、契丹政権にとってこの地がいかなる場所であるかを追究する。その結果、皇帝が巡幸して宋側に圧力をかけたのは乙室部の遊牧地確保にあったことを指摘した上で、地界交渉にかかわった人々の多くが太子派であったこと、つまり地界交渉は政争における太子派の仕掛けの一つであったことをはじめて明らかにした。また、代北地方は遼・宋交渉の表街道である河北の涿州―雄州ラインに比べて副次的なものとして、これまでさほど注目されていなかったが、論者は第四章で、一〇九九年の宋遼交渉においても遼帝の当地への巡幸が意味を持ったことを指摘し、遼における代北の地の重要性を浮かび上がらせた。

〔3〕外交関係を三者関係としてとらえる視点の貫徹

上述したように二国関係史の専著は存在するが、実際の外交は三国間の問題であることがしばしばである。従来の研究がそうした点を閑却してきたわけではないが、三国関係について局部的に注目するだけで、一貫してそれを意識した研究はない。

本論文はその点を強く意識し、第二章では一〇六〇年代後半からの宋麗通交再開交渉について、『東坡志林』の記事に注目し、これが単純な二国間交渉ではなく、高麗側の背後に契丹の意図が存在していたことを読み取る。さらに、従来専論が全くなかった一〇九九年の宋・遼交渉をめぐるオリジナルな研究においても、開封での正面の交渉に、西夏の動向や背後での遼朝の工作をからめて、三国関係の入り組んだ展開を丁寧に腑分けした。その結果、十一世紀後半の国際関係史がこれまでもっぱら宋の立場からみられてきたのに対し、当該時期において宋麗関係、宋夏関係の監視・調停者たる遼朝が国際秩序の維持機能を果たしていたことが明らかとなった。

このように、本論文は当該時期の外交関係史に新しい視点を導入することによって、数々の成果をあげているが、所期の目標にはまだ到達していない。論者は契丹中心の国際関係史の構想に肉付けするために、宋側の史料や『遼史』『高麗史』はもちろんのこと、契丹の碑刻も渉猟して、漢字史料で能うるかぎりの作業をおこなったが、漢文の世界のかなたに広がる未開の領域にはまだ踏み出していない。

また、遼朝を「北極」とする天界図のフレームが明確でなく、「ユーラシア東方」「東アジア」といった言葉が未整理なままに混用されているのも、論者が中国中心史観からの脱却を試みながら、中華世界を越える契丹帝国の外延をとらえきれていないからであろう。しかし、これは新しい外交史誕生への産みの苦しみの表れというべきものであって、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月22日に調査委員3名が論文内容とそれに関わる事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。